

昭和30年代の

僕と日本の少年時代

備忘録



千葉豹一郎

あの日、未来は明るかったー。

慌ただしくもほっとりと、
現代人の郷愁を誘う

“昭和30年代のマスカルチャー”

デパートはワンダーランド！

Department store

10年ほど前のことだ。今は閉店した某デパートに出店していた洋食店で、時折昼食を取っていた。場所柄、女性客が多かったが、その店は紳士服売り場の片隅にあったせいか、時間をすらすらとゆったり過ごせ、原稿を書くこともあった。

ある時、その階のトイレが清掃中だったので階下の婦人服売り場まで降りると、フロアからトイレの中にまで厚いじゅうたんが敷き詰められているではないか。一方の紳士服売り場は一面リノリウム張りだ。男はどうでもいい、とまでは言わないが、少なくともオマケ程度の扱いのようだ。改めて、デパートは女性のための牙城（がじょう）だな、と苦笑した。子どもの時も、買い物に熱中して周囲の見えなくなった女性たちに突き飛ばされたり、足を踏まれたことが何度もあった。それでもデパートは、男の子も惹（ひ）きつけて離さない、何が出てくるかわからないワンダーランドだった。近所の店に無いような物も豊富にそろっていて、銃砲売り場には本物のライフルや猟銃まで並んでいた。

僕の祖父母は昔の人らしく、時々デパートを「百貨店」と呼んで絶対の信頼を寄せていた。記念写真を撮ったり改まった買い物をする時は、必ずデパートを利用して、僕もよくお供した。日本橋の三越、高島屋、白木屋（東急になった後閉店し、現在のコレドに建て替わった）、新宿の伊勢丹。目当ての物を買ってもらうまでは良かったが、いろんな服を試着させられたり、長時間引っぱり回されると、帰宅を促すのがパターンだった。そんな時の大人の切り札が大食堂だ。子どもたちにとって、デパートをデパートたらしめていたのはここだった。

大食堂とスナックコーナー

以前は大抵のデパートに大食堂があり、休日には家族連れで大混雑していた。店頭の大きなショーケースに並んださまざまな口ウ細工の見本は、眺めているだけで楽し

かった。外国人観光客が面白がって買っていくのもよくわかる。だが、とても見本をのんびり眺めてなどいられない。ここから食券売り場まで行列が続き、席を確保するのも一苦労なのだ。それでも、店員に注意されるまで、多量の買い物袋でいくつもの椅子を占領している強者もいた。食卓の中央にはセルフサービスのお茶があって、どこでも申し合わせたように水玉模様の茶碗なのがおかしかった。

メニューは定番のお子様ランチから和、洋、中の何でもあり、三色アイスなどのデザート類も豊富で、子どもが喜ぶような盛り付けがなされていた。どの子どもも、ここでは皆屈託のない笑顔を浮かべている。そうした中には、母親が買い物しているあいだ、時間をつぶしているらしい父子連れも少なくなかった。大人客がほとんどの店は、どんなにおいしくともやはり子どもにはあまり居心地が良くない。“ファミレス”など無い時代、ここは家族全員が気兼ねなく過ごせる数少ないパラダイスだった。冷凍食品が普及していなかったため、各デパートの食堂は創意工夫と努力で競い合い、それなりにおいしかった。

デパートに大食堂を置くことを思いついたのは、阪神グループの創業者、小林一三だといわれる。小林は阪神デパートの食堂の決まった席で、いつもトーストをほおばりながら、家族の幸せな風景を眺めるのが好きだったという。大食堂は営利より顧客サービスのためだったらしいが、稀代（きだい）の実業家はさすがに目の付け所が違う。大食堂が無かったらデパートはかなり性格の異なった物となり、かつての繁栄も無かったかもしれない。

僕が一番行ったのは日本橋三越の食堂だった。祖父と一緒にことが多く、祖母や母とは数えるほどしかない。祖母との時はいつも買い物に長引いて、食事はまた今度、となるのが常だった。後年、祖母は「あんたと一緒にだと、帰りが遅くなってもおじいさんは文句言わなかったから」と打ち明けた。何のことはない、僕は人質だったのだ。

お子様ランチは1、2度食べただけだった。子どもの時はチキンライスがあまり好



昭和33年・日本橋三越 6F 大食堂
写真：(株)三越伊勢丹ホールディングス提供

きではなかったうえ、ヤケドしないようにとの配慮なのか、作り置きしていたのか、猫舌の僕にも冷め過ぎていて、子どもだからとバカにされているような気がしたからだ。昨今は注目されるお子様ランチも、このころは客も店側もどうも一段低く見ていたように思う。結局、好き嫌いの多かった僕は、どこのデパートでもハンバーグ、マカロニグラタン、固焼きそばといった、ほぼ決まった物しか食べなかった。同世代が一番に挙げるマカロニグラタンは、ハンバーグと並ぶ子どもの好きな代表的メニューだった。

三越ではコキールもメニューにあって、これもよく食べた。量が少ないながら、貝殻に入ったコクのあるソースは絶品だった。僕がデパートに行くのを渋ると「コキールや固焼きを食べよう」と、よく水を向けられた。

クリームソーダも思い出深い。祖父は僕が食べ終わるのを見計らって、いつもクリームソーダの食券を買いに立った。「何を食べる？」とは聞いても、何を飲むかとはついぞ聞かれなかった。今は好きなクリームソーダも、そのころは透き通ったグリーンが濁るのが何となく嫌で、プレーンのソーダの方が有り難かった。だが、祖父なりの厚意と、「子どもはクリームソーダが好きだ」という図式が頭の中にあっただろう。とても言い出せず、なるべく濁らないようアイスクリームを食べてからソーダを飲むようにしていた。

このように祖父は僕を一番に考えてくれたが、父親は少々違っていた。小学校に入学した前後、新宿の伊勢丹でディズニーの Donald Duck の 8 ミリフィルムを買ってもらってから、大食堂で固焼きそばを食べ



姿を変えて残の大食堂 日本橋高島屋「Rose」



松屋浅草

た。ところが、その時は苦手だった玉ねぎと干しいたけがいっぱい入っていて食べ残した。すると父親は、「自分のおなかと相談しろ」と機嫌が悪くなり、後々まで何かあるとそのことを持ち出してきた。生来の外出嫌いな父と一緒に外食するのはまれだったが、それ以後はまた文句を言われてはたまらないので、メニュー選びには気を付けた。

*

デパートには食堂の他、ホットドッグや生ジュースを出すスナックコーナーもあって、こちらも楽しみだった。初めてソフトクリームを食べたのも（ストロベリーで30円だった）、白木屋の駐車場横にあった売店だった。ちなみに当時、同店の駐車場は老舗（しにせ）洋食店「たいめい軒」の斜め向かいのここだけで、10台入るか入らないかぐらいだった。それで事足りたのだから、日本のモータリゼーションがいか急速に発達したのかがわかる。

高島屋のスナックコーナーでは、こんなこともあった。中学生になった昭和43（1968）ごろ、学友とマヨネーズのかかったホットドッグを食べた。混雑していたので踊り場で食していたら、上品な和服の年配女性が話し掛けてきた。「あのう、ちょっとお伺いいたしますが、それ、何という食べ物でございましょうか？」「ホットドッグといいます」「そうですか。どうもありがとうございました」

女性は深々と頭を下げて店のほうへ向かった。いかにも山の手の上流婦人らしいその方にとって、立ち食いなどもっての外に違いない。しかし、デパート特有な雰囲気は背中を押したのだろう。僕は、ささやかな楽しみを見つけたその御婦人がリピーターになったと確信している。

しかし、こうしたコーナーは入れ替わりが激しい。次に行った時には無くなっていることも多かった。不動と思われた大食堂にも、このころから変化の兆しが現れ始めていた。確か、いち早く名店を入れたのは

この高島屋で、他のデパートもこれに習い、店頭のショーケースも徐々に店ごとに区分されるようになっていった。今では多くの有名デパートの大食堂が、各店の料理を味わう場所を提供する寄り合い所帯となっている。味は良くなったかもしれないが、その分価格も上がって、何より庶民性と玉手箱のような面白みが失せてしまった。首相官邸（現在の公邸）には食堂があったようで、「デパートの食堂並み」という感想を聞いたことがある。メニューが雑多で可もなし不可もなし、まあまあという意だろう。いずれにしても「デパートの食堂」は誰もがピンと来る共通の基準だった。現在ならファミレスがこれに相当するのだろうが、両者は似てはいても、大きく異なるように思う。

屋上遊園地

大食堂と並ぶ日本のデパート独自の目玉施設は屋上遊園地だろう。屋上遊園地があることがデパートの必須条件であるかのようになり、都心のデパートはもちろん、少し離れた地域でも、デパートと名の付く所には小規模でも大抵屋上遊園地があった。

込み合った館内に長時間いることは子どもには苦痛だ。家庭や学校では、天気の良い日以外は電灯を点けない。それが、デパートでは天候にかかわらず、外光の入る場所でも日がな電灯がともされている。窓も閉めっぱなしだ。こうした環境に不慣れな子どもにはひどく不健康な場所に思え、次第に息苦しくなってくる。ここで働く店員さんは大変だな、と同情さえしたくなった。

しかし、屋上へ出ると一気に開放感が込み上げてくる。まだあまり高い建物も無かったから、四方に景色が広がり、富士山が見えることもあった。ここから眺める都会の風景は絶景だった。

屋上には人工芝が貼られ、ペットショップやフラワーショップもあって心が和んだ。ソフトクリームなどの売店も併設されていて、ベンチでの姿を変えて残の大食堂 日

本橋高島屋「Rose」95デパートはワンダーランド！ んびり過ごしてる大人もいた。そして、これらの中心を成していたのが遊園地だった。限られた場所ゆえ規模は小さいし、遊具の種類も知れている。ティーカップの回転する円盤や、メリーゴーランドなども後樂園のような遊園地に比べて小型で、ゲームセンターに毛の生えた程度だった。でも、こうした雰囲気の下ではまったく別の味わいがあり、多くの人々に屋上の心象風景として焼き付いている。

屋上遊園地は西洋人にはいたく珍しく、日本を代表する風景の一つに映るらしい。『東京暗黒街 竹の家』（1955）というれっきとしたハリウッド映画にも出てくる。無声映画時代の国際スター早川雪州、山口淑子、テレビの『アンタタッチャブル』でブレークする前のロバート・スタックらが主演し、大規模な日本ロケを敢行。浅草の松屋の屋上遊園地で、クライマックスの銃撃戦が繰り広げられた。数々の珍妙な日本の描写が不興を買って「国辱映画」とも言われたが、カラーのシネマスコープに収められた当時の風景の多くは今は失われ、貴重な財産になっている。

このロケで日本に滞在中、スタックが実兄に宛てた私信でも屋上遊園地について触れている。日本食が口に合わず、雪州に招かれた料亭で出た海老の踊りに手を付けられなかったことなどが書かれているが、見下したようなところはまったく無い、極めて紳士的な文面だった。日本人の活力を賞賛していて、最も興味を引かれたのは屋上遊園地だったようだ。驚くと同時に、狭い国土を有効に利用するための日本人の知恵、との分析も披露している。確かに、屋上遊園地はビアガーデンと並んで、独自の発展を遂げて生活の一部となった日本が誇る屋上文化といえよう。

ところが、有るのが当たり前と思っている物は、いつの間にか無くなっていたりする。気が付いた時にはもう遅い。『竹の家』に出てきた松屋の屋上遊園地も2010年に

閉鎖された。親が親しんだ場所に子どもを連れ、その子が大人になった時にまたその子と同じ場所へ……。今の日本ではこの図式が大きく崩れ、屋上遊園地もその一つとなりつつあるのは寂しい。

屋上からヘリコプターが飛び！

昭和 36、37 年（1961-62）ごろだった。池袋の西武デパートの屋上で、何とヘリコプターの遊覧飛行をやっていた。場所が場所だから、一般にも手の届く料金だったのだろう。

そのころはヘリコプターがもてはやされ、結構身近な存在だった。僕がよく観ていたアメリカのドラマにも出てきた。刑事物の『ハイウェイ・パトロール』は、主人公のダン隊長がパトカーやヘリコプターを駆って、空中から犯人松屋浅草デパートはワンダーランド！を追いつめていった。『決死のヘリコプター』は題名通りヘリコプターが主役で、2 人のパイロットが、救助や時には犯罪捜査に大活躍した。これらはいずれも 30 分番組だったから、テンポが良く、余計にヘリコプターの機動性が際立った。また、夕方の短いニュースのオープニングにも、ヘリコプターの飛び立っていく映像が使われていた。

時々本物のヘリコプターやセスナ機も飛んできて、話に聞く戦時中の投降ビラより空中から宣伝のチラシをばら撒き、爆音で飛び出してきた子どもたちが舞い降りてきたビラを何枚も受け止めていた。鎌倉に海水浴に行った折も、ヘリコプターが飛来して大量の映画の宣伝ビラを投下させていった。しかし、ほとんどは何の広告だったか記憶に無く、あまり効果があったとは思えない。当時は法的に問題が無かったにしても、後には多量のビラが残され、下手をすれば宣伝どころか反発だって買いかねない。しかし、子どもたちは目の当たりにするヘリコプターに胸をときめかせていた。

僕もヘリコプターに乗ってみたいって仕方なかった。その夢をかなえてくれたのは同居の叔父だった。僕と一緒にテレビを観ることの多かった叔父は、僕の願いを知っていたらしい。ある日曜日、叔父と僕は池袋の西武へ向かった。西武は家から遠く、祖父母は新興のデパートを敬遠していたので、行くのは初めてだった。流行に敏感で新しい物好きな叔父のことだから、ヘリコプターも体験済みだったかもしれない。だが、興

奮していた僕は、食堂でカレーを食べた以外、前後のことはまったく覚えていない。

早めに食事を取って向かった屋上では、階下まで続く行列ができていた。いつもなら諦めるところだが、ヘリコプターの誘惑が勝った。どれくらい待たただろうか。ようやく僕達の番が回ってきた。間近で見るヘリコプターは迫力満点で、確か水上にも降りられるフロート仕様だった。「頭を下げて下さい」と係員が言ったが、言われなくともそうするよ。ダン隊長がソフト帽の縁を押さえながら、上半身をかがめて乗り降りする姿がカッコ良く、真似を試みたかったのだ。僕は帽子もかぶっていないのに額に手をやり、かがみこんだまま乗り込んだ。

係員がベルトを締めてくれ、いよいよ離陸だ。僕たちだけだったか他に何人か相客がいたか、それすら記憶は無い。地上の人々がどんどん小さくなって、味わったことのない高揚感がわき上がってきた。あいにく天気が悪く、池袋は青かった！とはいかずに灰色の印象だった。だが、にぎやかな駅周辺を離れると畑らしい空き地も見え、東京も案外広いんだとイメージが一変した。どこを飛んでいるのかわからないうちに夢の時間は瞬く間に過ぎた。10 分か 20 分ぐらいだったろう。長くも短くもなかった。機は元のヘリポートに無事帰還した。付近の地理に疎いため、空から普段とは違うなじみの景色を眺められなかったのが今でも心残りだ。屋上へ続く行列はさらに長くなった気がした。いざ目的を果たすしてみると、よくこんなに待ったものだとも自分でも感心した。辛抱強く付き合ってくれた叔父には感謝だ。もう一度乗ってみたかったが、これで良しとしなければなるまい。大人になるまであったら、今度は自分で乗ってみよう。そう思った。だが、大人どころか、それから何年もしないうちに無くなったと知った。事故があったとは聞いてないから、元々期間限定だったのか、騒音が問題になったのかもしれない。周囲の急速な発展で、事故も懸念されたのだろう。

それからほぼ 10 年、池袋に近い高校に進学し、帰りによく近辺に寄り道した。文芸座などの名画座やリニューアルオープンしたばかりのぶらんでーと東武、パルコ……。西口に東武、東口に西武なのがおかしくもややこしい。今とは比較にならない発展途上だったが、それでも上空をヘリコプターが飛び回っていたのが信じられな

かった。

くしくも同じころに、テレビの深夜劇場で観た 2 本の邦画に懐かしい風景が出てきた。東宝の『紅の空』（1961）は主人公たちがセスナ機のパイロットで、チラシをばら撒く場面が登場。もう 1 本の日活の『都会の空の用心棒』（1963）は、主役の小林旭が西武の遊覧ヘリのパイロットの設定だった。東口のロータリーで乱闘するシーンもあって、当時ののんきさに我ながら驚いた。ただ一度乗ったヘリコプターにせめて映画の中でも再会したいが、以来観る機会がない。

屋上にゼロ戦が現れた！

デパートの屋上はヘリコプターばかりか、あのゼロ戦さえ見せてくれた。昭和 30 年代後半は映画やテレビで戦争物が流行し、子どもたちのあいだでも忍者と並んでちょっとしたブームになっていた。市民権を得つつあったプラモデルも軍艦や戦闘機が次々発売され、マンガ雑誌でも元軍人の武勇伝や戦記物がもてはやされた。

中でも戦艦大和とゼロ戦が人気を集め、60 機以上を撃墜した坂井三郎は有名人だった。『ゼロ戦はやと』『ゼロ戦レッド』などゼロ戦を題材にしたマンガも多く、前者は『北の国から』の倉本聰（そう）が脚本と主題歌の作詞も手がけたアニメにもなって人気を博した。石原裕次郎主演の『零戦黒雲一家』（1961）、そのテレビ版とも言える『ゼロ戦黒雲隊』（特撮やセットはチープだった）も土曜の夜 7 時から放送されて、ブームはピークに達した観があった。今では考えられないことだが、案の定、こうした風潮を危惧する声が高まり始め、僕たちの耳にも聞こえてきた。

＊

本物のゼロ戦が現れたのはそんなころだった。グアム島かどこかで損傷の少ないゼロ戦が発見され、復元して展示されるという。そのニュースを持ってきたのは父親だった。

僕の世代の父親の多くは、2、3 年ほど年齢が足りなかったため戦争へは行っていないが、軍事教練や軍国教育はしっかり受けている。それは平和な時代になっても容易には抜けず、友人の父親の中には戦地へ行った人よりずっと勇ましいことを言う人もいた。うちの父親は性格も僕とは違っておとなしく、政治的にもノンポリでいわゆ

るタカ派的なところはまったく無い。戦争中の話もありしなかったが、『丸』という一種のミリタリー雑誌はよく読み、ゼロ戦が好きでこれに乗って大空を飛びたかったとはよく言っていた。

祖母の話では、山本五十六元帥の国葬にも参列して、大粒の涙を流しながら帰宅した父が、飛行兵に志願するというのをなだめるのに苦労したそうだ。本人に真偽を確かめると、「あの時はな……」とお茶を濁された。

そのゼロ戦がやって来る。東京駅と同じぐらいの大きさだったという戦艦大和を見ることはかなわないが、ゼロ戦も見られるとは思ってもいなかった。復元に時間がかかったのか、その機会が訪れたのはしばらく経ってからだった。場所は日本橋の三越が高島屋の屋上だった。乗れるわけではないから、ヘリコプターの時のように待たされることはないだろう。だが、叔父と行った高島屋の「フレンドシップ7」（米国初の有人地球周回飛行に成功した宇宙船）の展示の折は大混雑で立ち止まることさえできず、押されるわ足を踏まれるわで散々だった。

ところが会場に着いてみると、行列どころか普段の日曜日とさほど変わらなかった。日にちを間違えたかと思ったが、ゼロ戦は確かにそこにいた！ 周囲を数組の親子連れが取り囲み、興奮した表情で見入っている。近づくにつれ、胸が高鳴った。そんなはずもないのに、パイロットの遺骸が朽ちた飛行服を着て座っているような妄想にかられ、低音で流れるジャズのBGMがそれに拍車を掛けた。もちろん、風防の開けられた操縦席は空だった。残念ながら回りにロープが張られて手を触れることはできなかったが、思ったよりもずっと大きい。ほとんど無傷で手に入れたゼロ戦を基に作ったアメリカのグラマン戦闘機は、同じ性能にしようとしたらどんどん大きくなってしまったと父親が以前苦笑していた。小さくするのが得意な日本とは、まったく逆だ。写真やプラモデルでは実感できないが、国産車とアメ車ぐらいの差があるのだろう。

それより印象的だったのは、色鮮やかなことだ。軍用定番のカーキ色というより緑に近く、日の丸も赤々とえらく目立つ。復元で塗り立てとはいえ、存命の関係者も多かったから、当時の姿と掛け離れているはずはない。初めて後楽園で野球観戦した際、芝生の緑が眩しかったのと同様に、見慣れ



たモノクロ映像とのギャップがそう感じさせたのかもしれないが、とにかく美しい。

背後の青空が視界に入るようにしゃがみ込み、ゼロ戦が現役だったところに思いを巡らせた。編隊を組んで飛び勇姿はさぞ美しく壮観だったに違いない。いろいろなシュチュエーションが浮かんでは消えたが、不思議と戦闘の場面は浮かんでこなかった。ロマンさえ感じた。きっと父親もそんなイメージを勝手に膨らませて憧（あこが）れたのだろう、と横を向いたら、位置を変えながら写真を撮りまくっている。僕よりずっと思い入れがあるだろうに、そうした素振りは終始見せなかった。

パイロットは生きているのだろうか、どんな人だったのだろうかと考えていると、「帰ろうか」。気が付けば、見物客はまばらになっていた。おかげでじっくり見られたが、この人出の少なさと当時のゼロ戦の人気とは著しくバランスを欠く。PR 不足にしても理解に苦しむ。学校でも見に行った友人は一人もなく、あまり残念がりもしなかった。ひところのブームも潮時にさしか

かっていたのかもしれない。

オリンピックを境に東京も社会も大きく変わり、戦後 20 年の節目ということがさかんに行われていた。人々は戦争に区切りをつけたかったのだろう。こうした時代の狭間に姿を現したゼロ戦は、「忘れるなよ」と言っているようにも思えた。僕にとってもゼロ戦は、デパートの屋上における最後のイベントとなった。以後は家族でデパートに行く機会も減り、怪獣ショーでにぎわうようになった屋上は、もはや僕たちの年頃の行く場所ではなかった。ゼロ戦はその後何機か発見され、常時展示されている機もあるが、見たことはない。

ちなみにあの時父親が撮った写真はすべて、めったに使わなかった高価なカラーフィルムだった。やはりゼロ戦は特別な存在だったのだ。

著者：千藤豹一郎

作家・評論家。日本刑法学会、ベツト法学会会員。著書に『法律社会の歩き方』（丸善）『スクリーンを横切った猫たち』（ワイス出版）の他、『東京新聞』、『猫生活』（緑書房）『ミステリマガジン』（早川書房）をはじめ連載多数。独特な題材と切り口で、草創期からの海外ドラマの研究にも力を入れている。



当書 DVD 版は、月刊 FDI 編集部にて

本文：108 ページ / 映像：2 分 23 秒 2012 年 9 月 ミリアムワード(株) 発行

価格：1,980 円（税込）

株式会社ユニワールド 東京都世田谷区上北沢 3-17-5

TEL.03-6379-8890 FAX.03-6379-6190 info@uni-w.com